

## 「方法」講義立会記

(・・・-/-・・・)

芸術作品、と言われて、この講義を受講するまで私は、ダリの絵画であるとか印象派などの絵画を思い浮かべていた。しかし、それらはすべて視覚的イメージであり、芸術とは何かという問いに本質的に対応しうるものではない。もちろん芸術作品は、時には視覚的表現を用いるが、そこには必ず作者の意図が存在し、また、その意図は常時直接的に作品の中に現れるものではない。したがって、視覚表現を用いた作品のみを安直に芸術作品と結びつける発想は、芸術の理解において誤解を招く可能性がある。ではいったいどこからどこまでが芸術とよびうるのか。われわれに訴えかけてくるものである。私たちが普段行っている何気ないしぐさや目にするものを単に切り取り、区別化したものであってもそこに作者の意図、ある観念が介在する限りそれを芸術作品と呼ぶことは可能だろう。また、その斬新さは作者の強烈な意思とあいまって観賞者である私たちの前に複雑だが、どこか印象的なものとしてたち現れてくる。そのような芸術作品があるとして、あらゆる価値が相対化されやすい傾向を持つ現代において、そこに優劣というものはないものだろうか。現在におけるまで、本講義の内容から考えると、一定の評価を得てきたものは多くの場合がその斬新さによるものである。そのように考えると「方法」は確かに、方法を強調することにおいてある種の斬新さを持ち、優れているといえるだろう。しかし、方法はその斬新さゆえにある点が欠落しているかのようと思われることがある。それは、作者の意思である。作者の意思はどの方法の強調を作品にもたすかという選択において現れているという見解もあるだろう。確かにそうであるがそのような種類の意思というものは創作されたすべてのものに対して言える、いわば暗黙の了解のようなものである。そして私がここで述べているのは、そのような意思ではない。作者の今日の社会的状況における考え方や態度のことである。方法はその強調によって、各作品内にポストモダンの状況に対して否定的態度をかもし出しているが、皮肉なことにそれはすべて方法の強調という画一的な表現手法のために多様なアプローチを欠いており、ポストモダンの現状に対して対抗しうる十分な意思、または説得力を十分には持っていないように思われる。相対化のなかで原理的な主義を打ち立てることに意義を見出す「方法」は皮肉にも、その敵役であるポストモダンという存在によって相対的に意義を獲得していると私には思われる。